

## II-6

### 多発性骨髄腫における尿中骨吸収マーカーの意義

畑 裕之、原田奈穂子、立津 央、中村美紀、奥野 豊、満屋裕明

熊本大学医学部附属病院血液内科

【目的】尿中デオキシピリジノリン (DPD) および N 末端架橋テロペプチド (NTX) は骨髄腫の骨病変の指標となりうるが、その有用性は不明である。これらの意義の検討を目的として、症例の経時的測定を行った。

【方法】MGUS 2 例を含む 34 症例の尿中 DPD、NTX を平均 10.3 ヶ月にわたり述べ 299 回測定した。異常を示す症例では、異常値の平均を算出し、異常のない症例では全経過の平均を算出した。画像異常、または骨痛のある症例を骨病変ありと判定した。

【結果】NTX と DPD の値は有意に相関したが、DPD のみが骨病変と関連し ( $p=0.0093$ )、NTX は関連しなかった ( $p=0.0872$ )。骨病変検出感度、特異度は、DPD で 63%、77%、NTX で 44%、66%であった。MGUS 例は DPD 正常であり、形質細胞腫合併 6 例のうち 4 例は DPD 異常であったが、骨融解限局例では DPD は正常であった。観察中、骨髄腫の増悪を 16 例に認め、うち 8 例で DPD が増加、その 6 例は骨病変を有した。一方、骨髄腫増悪時にも DPD が正常であった 6 例のうち 4 例は骨病変を有さなかった。DPD 高値例の DPD 低下の要因は、化学療法および BP 製剤であった。

【結論】尿中 DPD は、DPD 高値を伴う骨病変例の経過観察に有用である。化学療法は DPD を低下させるが、症例によっては BP 製剤も必要である。一方、DPD 低値かつ骨病変の無い例に BP 製剤の投与が必要かどうかは検討すべき点である。